

**A Study on the Introduction of the Theory of Evolution in
Modern Egypt and Japan**

Dr. Hassan Kamal Harb

Modern Egypt and Japan accepted various foreign values of Western civilization during the nineteenth century. In this paper, the researcher compares the introduction and acceptance of the theory of evolution in Egypt and Japan, pursuing its paths in the two countries.

In both countries, the introduction of evolution was relatively quick, and there was almost no time lag with Western countries. On the other hand, the attitudes and interests in evolution in both countries are quite different. There was tension between evolution and religion in Egypt. Religionists took a negative attitude toward evolution and sought to prove Darwin's theory to be delusional. On the other hand, in Japan, there was no such tension and there were no restrictions like monotheism, so the theory of evolution was quite positive. The theory was welcomed by curious Japanese who are always seeking new knowledge. In addition, in Japan, social evolution was more attractive than Darwin's theory of evolution. At the same time, there were many debates about racism regarding white supremacy. For example, there was a discussion about the superior intelligence, abilities, and physical strength of white people. On the other hand, Egyptians were interested much more in the demonstrability and correctness of evolution. The Egyptians also showed greater interest in Darwin's theory of evolution than in social Darwinism. In particular, the theory of evolution of living things, including human kind, was the center of Egyptian interest. The biggest difference in the acceptance of evolution between the two countries was the standard of evaluation of evolution. In Japan, the theory of evolution itself was the standard of evaluation. In other words, in Japan, the theory of evolution itself was not a questionable theory, but was used as a criterion for demonstrability. The theory of evolution was one step higher as a proven truth, and controversies were competing for how well they were in line with evolution. In Egypt, on the other hand, Islam and

Christianity were the standard of thinking, and it was recognized that the entire universe, including humans, was created according to Allah's will. When evolution was introduced, it was often criticized and at least considered to be substantiated. The key word for the difference between the two countries was religion, especially monotheism. Unlike Egypt, Japan is not a monotheistic country, and the reason for the difference is that it has no ideas to resist the theory of evolution.

دراسة حول نظرية التطور في مصر واليابان في العصر الحديث

د. حسن كمال حرب

أستاذ مساعد بقسم اللغة اليابانية- كلية الآداب- جامعة القاهرة

تلقت مصر واليابان في العصر الحديث من الحضارة الغربية قيماً وأفكاراً متعددة، وكان هناك اختلاف كبير في درجة تقبل هذه الأفكار و تباينا واضحا في طبيعة هذا التلقي بين البلدين، حيث تقبل الكثير من اليابانيين بعض جوانب التحديث بشكل مطلق، بينما أعرض الكثير من المصريين عن قبول نفس الجوانب التي تقبلها اليابانيون. على الجانب الآخر، بينما تمسك البعض من المحافظين في كلا من مصر واليابان بما لديهم من عادات وتقاليد وقيم دينية واجتماعية موروثية، اجتهد البعض الآخر في مزج القديم بالجديد في محاولة منهم لاستيلاء تحديث يختلف عن النموذج الغربي بما يناسب الطبيعة التقليدية للمجتمعين المصري والياباني إبان القرن التاسع عشر. في هذه الدراسة، يتتبع الباحث دخول نظرية التطور إلى مصر واليابان، في محاولة للكشف عن جانب من جوانب التحديث في كل من البلدين. يسلط الباحث الضوء على المفكرين المصريين واليابانيين الأوائل الذين قاموا بنقل و مناقشة نظرية التطور، متتبعا مسار دخولها وعمقها في البلدين خلال القرن التاسع عشر وبدايات القرن العشرين.

تكشف الدراسة حالة الوثام التي كانت تسود العلاقة بين الدين والنظرية في اليابان، وذلك على خلاف ما كان قائماً في مصر. حيث اتخذ رجال الدين الإسلامي والمسيحي موقفاً مناهضاً تجاه هذه النظرية وسعوا لإثبات خطأ تطبيقها. في الجانب الياباني، لم يحدث مثل هذا التوتر والصدام بين النظرية من جانب وبين الأديان و المعتقدات اليابانية من الجانب الآخر، وهو الأمر الذي أدى إلى تكوين رؤية مثالية للنظرية، وخلق حالة من الاستحسان و الترحيب من قبل اليابانيين تجاه النظرية. على جانب آخر، أهتم اليابانيون بالجانب المجتمعي للنظرية أو تطور المجتمعات، وجانب تطور الجنس البشري والأعراق وبحث أسباب تفوق الجنس الأوروبي مقارنة باليابانيين في الذكاء والمهارة والجسد. في مصر، كان الاهتمام ينصب أكثر على مصداقية وصحة النظرية خاصة في مجال تطور الكائنات الحية وخاصة الوجود البشري و تطوره. الاختلاف الأكبر في قبول نظرية التطور بين البلدين كان يتمحور حول معيار الحكم على النظرية. في اليابان، لم توضع نظرية التطور في موضع شك أو ارتياب، بل كان ينظر إليها بأنها هي المعيار، وأنها حقيقة ثابتة ومعيار لصحة الأشياء ووجودها. على الجانب الآخر، كان الإسلام والمسيحية في مصر معيار الحكم على الأفكار وصحتها.

ورغم الاختلاف الواضح في مجالات تناول المفكرين المصريين واليابانيين لنظرية التطور، فإن القاسم المشترك بينهما تجاه نفس النظرية كان محنة التعامل تجاه التفوق الغربي طبقاً لنظرية التطور.

تكمن أهمية هذه الدراسة في تقديمها لأول مرة تشریح تاريخي وفكري لدخول نظرية التطور في اليابان مقارنة بالجانب المصري. حيث أجريت العديد من الدراسات حول نظرية التطور في مصر واليابان كلا على حدة، ولكن لا توجد دراسات مقارنة توضح و تبحث في درجة تقبل أو مزج أو رفض هذه النظرية في

البلدين والأسباب التي كانت دافعاً لظهور هذه الاتجاهات المتباينة. أخيراً، خلصت الدراسة إلى أن لب الاختلاف بين البلدين في تقبل ورفض النظرية يعود بالأساس إلى وجود ومكانة وتغلغل الجانب الديني بين الشعبين. هذا بالإضافة إلى الظرف التاريخي والسياسي الذي صاحب دخول نظرية التطور، والذي أدى إلى إحجام تجاه بعض المواضيع وقبول واستحسان تجاه البعض الآخر في محتوى وأهداف ومجال تطبيقات نظرية التطور..

近代日本とエジプトにおける進化論の受容に関する一考察

はじめに

日本とエジプトは近代化にあたり、様々な外来文化・思想を受容したが、その中でも進化論の果たした役割は大きかった。本稿では日本とエジプトにおける進化論の導入と受容について比較しつつ、それぞれが辿った道筋を追求する。

なぜ進化論なのか。筆者は、これまで近代日本とエジプトにおける教育の啓蒙活動、とりわけ西洋思想の受容とその対応の仕方について探ってきた。特に科学知識に焦点を当ててきた¹。その中で、西洋においても大きな衝撃を及ぼした進化論が、日本とエジプトではどのように受容され、また利用されたのかに強い関心を持っている。加えて、現在においても、エジプトにおける進化論の受け止め方は、日本のそれとは少々異なっている。学問上の理論として、教科書において猿からヒトへの進化の過程が登場するものの、現実的な受け止め方としては、この理論は西洋由来の理論であり、イスラームの教えとは異なると認識しており、完全に受容しているとは言い難い。このように、同じ理論でありながらも、日本とエジプトとではかなり異なった受容が見られる。このような違いは一体どこから来るのだろうか。本稿では、両国で同じような時期(1870-80年代)に導入された進化論がどのように受容されていたかを明らかにし、その受け止め方の相違と理由について探っていく。

背景

19世紀半ばになると、アジアとアフリカ諸国は列強諸国による植民地抗争の現場となった。植民地化への危機意識を抱いた国々は、列強諸国の軍事力と共に思想的側面にも大きな衝撃を受けた。西洋文明が齎した学問と、その背後にある哲学と思想、例えば物質主義や天賦人權説、個人主義、自由主義などは、従来の伝統的価値観と著しく相違していた。これらは、これまで保護されてきた伝統に衝突するものであり、社会構造や宗教と信仰に大きな打撃を与えることとなる。それは時として、伝統の否定、または拒絶や批判に及ぶこともあった。しかし、そのような危機的状況になっても尚、西洋思想は社会に伝播していく。日本とエジプトにおける西洋文明受容の主な類似点は、産業革命が齎した西洋国家をモデルにしたことである。それは、科学技術と高度な工業力、例えば電信や電報、蒸気機関、蒸気船、鉄道といった通信と輸送手段である。それと並行し、知識人達に強い衝撃と魅力を与えたのは「論より証拠」という概念であった。つまり、両国にとっての西洋は、外敵であると同時に近代化の理想的モデルでもあったのである。

では、進化論は両国においてどの様に展開していったのか。進化論は従来の西洋哲学、西洋思想とは異なっており、特に競争淘汰、弱者・不適者の淘汰といった考えは、大きな騒動を起こした。日本とエジプトでは、共に熱病の様にダーウィニズムが流行したが、その受容と展開には差が見られる。その差は、両国の伝統におけるダーウィニズムの正当性により発生していると考えられる²。両国とも20世紀初期に欧州留学から帰国した生物学研究者を通してダーウィンの理論が齎されたが、その導入は波乱を呼んだ。騒動を引き起こした進化論とは、ダーウィンが1859年の『種の起源』と1871年の『人種の起源』にて発表した理論である。その理論とは、種にはたくさんの個体が存在し、その個体は生存のために競争する。その競争は、個体自体のみならず、子孫を残し増やすために行われる。生存競争のメカニズムとは、強者生存、適者生存、又は自然淘汰などである。このメカニズムに時間の経過と環境への適応力が加わることで、優位な変異の中に自然淘汰が起き、そのサイクルは永続するというものである。

こうした進化論が伝播される以前から、多くの思想が両国に導入されてきたが、進化論の影響は多種多様であった。また、進化論を受容するにあたり、両国によって関心のある箇所が異なり、その後の展開が相違していく。しかし、両国共に西洋人の優越性に苦悩しており、その対応として進化論を受容されていったことは共通点の一つである。進化論を受容にあたり、様々な解釈と対応が生まれていく。西洋人の優位性を認めるか、抵抗するか、補足や補完するか、自分たちの優位を模索するか、競争相手の弱点を攻撃するかといった考えが生じた。日本人とエジプト人の中には、遺伝的、言語的要因に注目し、その変更を試みようとした者もいた。

近代日本とエジプト、それぞれにおける進化論の受容に関する研究は数多くあるが、両国の受容を比較する試みはない。これまでの研究では、近代における進化論の受容が幅広く取り上げられてきたが、日本と他国における進化論の受容に関する関心は少ない。また、それぞれの国における進化論の啓蒙家についての研究は多くあるが、彼らと他文化の思想家或いは啓蒙家における進化論の受容の比較も少ない。そのような中、本稿は日本とエジプトの近代化の一面を理解する試みである。両国ではどのように進化論を受容されてきたか、そしてどのように展開していったのかを考える。

第一章：日本における進化論の導入

日本が列強諸国による植民地抗争から逃れるためには、西洋文明を導入するしか方法がないという考えが、特に知識人の間で強く意識されていた。そのような状況の中、ダーウィンの進化論は登場する。本章では、日本人がどのようにダーウィンの進化論を導入し、またどのような関心を持っていたかを追求していく。

1-1. 進化論の導入

ダーウィンの進化論が日本に伝播されたのは明治初期であった。1878年には、東京帝国大学でお雇い教授として来日したアメリカ人フェノロサ (Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908) により教えられている。フェノロサが紹介した進化論は生物学のみならず社会進化論にも及び、彼の受講者の中には井上哲次郎がいた³

。また、来日したアメリカの動物学者であるエドワード・シルヴェスター・モース (Edward Sylvester Morse, 1838-1925) が東京帝国大学で講義した際、ダーウィンの進化論を体系的に紹介し、その後日本社会に広く浸透していった⁴。モースが明治10年に行った進化論の講義では600名を超える受講者がいた⁵。しかし、モースよりも前に進化論について講義したのは東京医学校の博物学の教授として来日したドイツ人のヒルゲンドルフ (Franz Hilgendorf 1839-1904) である。ヒルゲンドルフはダーウィンの進化論を用いつつ、貝化石研究について講義した⁶。

一方、進化論の本として一番早く出版されたのは、明治初期に伊澤修二が日本語に訳したハックスレー著『生物原始論』である。同書は部分訳であり、1889年に伊澤は全訳の『進化原論』を出版した⁷。長尾(2012)は、明治時代における進化論に関する翻訳と出版の流れについて以下のように語っている。

『生物始源一名種源論』(立花鉄三郎訳)(明治29 [1896] 年経済雑誌社出版)はダーウィンの『種の起源』の翻訳である。ただし『生物始源一名種源論』は『種の起源』の第6版(1872 年発刊)を全訳してある。[ダーウィン]『人祖論』(神津専三郎纂訳...明治14年登高自卑斎蔵出版)はダーウィンの『人間の由来』の訳本とされている...しかし、...じっさいは『人間の由来』だけではなく、表表紙にあるように纂(編)訳なのである。「[チャーレス、]ダーウィン著、東京開成館訳、種之起原：生存競争適者生存の原理。[丘淺 次郎譯文校訂；東京開成館]明治38年(1905) ...この副題は、一般の人々がダーウィンから何を読みとったのかをよく示している⁸。

このように、進化論は書物、及び欧米での日本人留学生、お雇い外国人教授の講義などによって導入された。また、その特徴は、学術上における新たな理論として伝播されたことである。次に、進化論において、日本人はどのような関心を持っているかを見る。

1-2. 人権と平等

幕末時代末期から明治初期にかけて、天賦人権という西洋思想が爆発的に流行していた。西洋文明の天賦人権に憧れた当時の知

識人は、競争という価値より自然権や平等、自由などの価値を啓蒙対象とし、明治社会に大きな影響を及ぼした。例えば、西周(1829年－1897年)は『百学連環』にて、君臣や男女関係などにおける平等についてや、相関的ないし相互的権利・義務を互いが担い合うこと、人間性の中にある「立法服法」の原質としての自愛と同情などについて示している⁹。また、福澤諭吉(1835－1901)は、明治初期のベストセラーであった『学問のすゝめ』にて「天は人の上に人をつくらず天は人の下に人をつくらずと云へり」と述べ、天賦人権を主張している¹⁰。中江兆民(1847－1901)の『民約訳解』などにも天賦人権的な考えがみられる。このように、啓蒙家らは、日本社会を改善し近代化することのみならず、対外的独立を達成するために、封建的身分制を打破して人民全体を国家の主體的担い手に高めようと考えていた。その後、天賦人権論は自由民権運動の理論的支柱となっていく。

こうした状況の中、天賦人権的な考えを抑えるための手段として、進化論が注目される事となった。換言すれば、天賦人権を否定する手段として進化論が日本に根付いたといえよう。その潮流を代表する人物の一人が加藤弘之(1836－1916)である。加藤は1882年に出版した『人権新説』で、1874年に出版した『国体新論』にて弁証した天賦人権説を批判し、自由民権を徹底的に否定した。『人権新論』の目次を見ると、加藤の態度の極端な変化が把握できる。

目次

第一章 天賦人権ノ妄想ニ出ル所以ヲ論ス

第二章 権利ノ始生及ヒ進歩ヲ論ス

第三章 権利ノ進歩ヲ謀ルニ就テ要スヘキ注意ヲ論ス¹¹

また、明治初期の加藤は『国体新論』において「君主も人、人民も人なり」と述べ、『真政大意』では「造化と申すものは実に奇々妙々なもので、又別に一つ結構な性を賜りてあるが、夫れは又何ぢやと云ふに、所謂仁義礼讓孝悌忠信杯云ふ類ひのもので」と人権論を支持している。しかし、その後『人権新説』を執筆した際、天賦人権説を完全に否定した¹²。ここで、加藤は天賦人権論を妄想と形容し、自由や平等などは天賦人権的でなく、国民と

君主或いは政府との契約によって定まり、人間には知力体力の格差があると論じている。鵜浦裕(1993)は、加藤の目的は進化論を利用して集権的政権を支持することであり、天皇の適者と皇室の優越性を正当化することであると述べている¹³。

以上のように、進化論の導入に対する日本人の関心の一つは、明治初期に圧倒的な人気を誇った天賦人權論を否定する支柱としてであった。それにより、自由民権運動に抵抗し、集権的政権を支持する方法となったのである。

1-3. 条約改正と西洋の優越性

幕末時代以降、日本における外国人の存在は、政権のみならず知識人にとっても憂慮すべき問題であった。不平等条約による治外法権や領事裁判、居留地、領事裁判権といった経済や社会などの面のみならず、イデオロギーと思想的な面でジレンマが生じた。それは、独立や、資本力と競争、人種と社会の優劣、伝統の保護などについてである。そのため、早期から幕府をはじめ、その後の明治政府においてもこの条約を改正することが不可欠であると見なしていた。しかし、改正についても様々な問題が議論の対象となった。例えば、内地雑居における外国人は、知力・体力、資本力を持ち、それが日本の社会と伝統に悪影響を及ぼす一方、近代化のためには必要不可欠な存在としても認識されていた。これと同様に、条約改正についても進化論に基づく賛成派と反対派があり、またそれぞれが更に分裂していった。

改正反対派の見解としては、内地雑居により日本人と外国人との間で生存競争が起き、それにより西洋人に劣る日本人が淘汰され、日本も亡国となってしまう懸念があるというものである。

最も強硬に反対を主張した大井憲太郎(1843-1922)は、土地所有権の問題も含め内地雑居について論じている。大井は、外資との競争が国内経済を衰退させるため、土地所有権を「外人に与ふる」ことは最大の「危険」だと反対した¹⁴。大井の他、政治家以外で反対を表明していた人物として、西村茂樹(1828-1902)や、谷干城(1837-1911)、富田鉄之助(1835-1916)、佐々木高行(1830-1910)、島地黙雷(1838-1911)、三浦梧楼(1847-1926)、堀江芳介(1845-1902)、海江田信義(1832-1906)、加藤弘之(1836-1916)、井上哲次郎(1865-1944)、井上円了(1858-1919)、杉浦重剛(1855-1924)、千頭清

臣(1856-1916)などが挙げられる。彼らの主張は、大井の内地雑居反対論と重なり合う点が多かった。例えば、海江田は、「我人民は資本智巧を以てせば欧米人に超越すること能はず、勤勉労力を以てせば動もすれば支那人に一步を譲るの実あるのみならず外人雑居は一種特異なる我性情を傷くるの恐あり」とし、内地雑居は「今日之を許るすを好まず漸次我国力の發達を待て之を許さん」と主張した¹⁵。板垣退助(1837-1919)も、内地雑居を不可とすることについて、「今日にても既に日本人ハ下等種族なりとて厭忌するもの少なからず」「歐洲人民ハ左まで恐懼すべきものにあらず」と述べている¹⁶。中江兆民は、「外人は外人なり、日本人に非ず、日本人に非ざる人の所有地は、日本国に非ず、故に其土地は終に日本国中の非日本国と謂はざるを得ず」、「国の存亡、盛衰は区々たる内地雑居の許否に関せざるなり」と力説した¹⁷。また、『三酔人経綸問答』では、弱肉強食は世間万物の生存の理であり、軍事力が強ければ強いほど、文明国として称えられるようになる。だから、軍備こそ各国の文明の成果の達成表であり、弱小国が軍備拡張競争の流れの中で多大の財を投じて他国に遅れた文明の利器を買い取る事は不可能であると記述されている¹⁸。それにより、国内の対立が自然に解消し、危ない小国を捨てて安穩な大国になり、弱肉強食の世界の大勢に素早く優位を占めることができるのであると論じている¹⁹。

また、進化神に関して次のように説明している。西洋が規定した一直線の進化の理法に随って進むものではなく、実は進むように見えながら退き、退くように見えながら進み、曲がりくねっているし、各文化の特性によってそれぞれの在り方も変わっていく。進化神の模様の変化は予想のつかないもので、必ずしも「良くなる」とは限らない。また、一社会の進化の理がこのように成し遂げたとと言っても、他の社会の進化の理は同じ軌跡で同じ形に成り遂げねばならないわけではない。西洋社会にとっての進化の理を進化神の真の姿として盲目的に崇拝するのは、進化神の多様性を認識していないと述べている²⁰。許時嘉(2014)は、兆民が進化神の多義性を示すことによって、明治日本が西洋社会の有様を唯一の文明の姿として信じ込み、自国の価値観をそれと置き換えようとする軽薄さと空虚さを示していると論じている²¹。

1-4. 人種盛衰

西洋人の知力体力の優位性に関する進化論に基づいた議論は、明治後半に至っても継続していた。しかし、これまでのように生物物理学を中心とする視点とは異なったアプローチが現れる。国民の間に忠君愛国の精神を醸成させようとする試みである。その代表の一人が、井上鉄次郎である。

井上は、『内地雑居論』において「三千八百万人の中非凡卓絶の人往々之あるべきも、概して之を論ずれば、日本人種は今日に至ては尚ほ欧洲人種より一等下劣なりと謂うべし」と劣等意識を表現している²²。彼は、内地雑居を実行すれば、条約改正によって得る利益よりも、それによって生じる弊害の方がはるかに重大であると考えた。内地雑居による主要な弊害は、外国人が日本の土地を占有することによって日本人の「生活居住」すべき土地が「縮減」する事、優等人種である欧米人との競争に敗北する事である²³。つまり、内地雑居を実施すれば日本人種と白人が争う生存競争の場になり、日本人の方が淘汰されると考えているのである。しかし、日本人はアジア人に比べれば少しは優れているので、生存するとも推測している。加藤弘之も、内地雑居を実践すれば、経済資本は白人に牛耳られ、労働市場は勤勉な中国人に奪われるので、日本人の居場所がなくなると述べている²⁴。

次に彼らが、劣等意識を持った日本人が、優位な欧米人に勝つためにはどのように対応すべきか、また日本人をどのように改善していけば良いと考えたのかを見てみよう。

兆民は、対外問題の大元は国民の劣等意識にあり、その意識に潜む「外国人崇拜の習風」について批判した。また、「愛国的神経病」を強調し、国家の危機に際しては、志士の憂国の情に呼応する如く国民が愛国心を発露すべきだと示唆している。その道徳論は、自国と自国民の自主自尊、愛国心形成とともに、政府の穏健路線を非難して対外強硬政策の下支えとなる国民の強いナショナリズムの発現を欲求している²⁵。鶴浦裕は、井上鉄次郎と加藤弘之は、ダーウィニズムを用いつつ、道徳論を展開したと論じている。井上は「有意淘汰」説を唱え、戦争の勝負は肉体的また物理的のみならず、最も重要なのは勝つ意志の強さだと主張し、「勝敗軒丸生存競争」を「有意淘汰」と名付けた。加藤は、天皇制

を支持するため進化論を利用した。彼は、「自力淘汰」説を唱え、「個体間の生存競争」を「国民の間の天皇への忠孝競争」に、「適者生存」を「適者殉国」という考え方に置き代えた。勝負の決め手は「忠誠競争」であり、国民の間に忠君愛国の精神を醸成すべきであると考えた²⁶。

第二章：エジプトにおける進化論の受容

19世紀のエジプト及びイスラーム世界は、列強諸国の圧力とその背景にある思想と哲学に対して、基本的に否定的な態度を貫いていた。しかしだからと言って、全ての西洋の思想が否定されたわけではない。ダーウィンの進化論に対しては肯定と否定の両方が存在していた。本章では、エジプトにおける進化論の紹介と、宗教との調和の試み、肯定と否定という立場に焦点を当てる。

2-1. 進化論の導入

本節では、進化論はエジプトにおいてどのように紹介されたか、またその過程を追い、エジプト人の関心を明らかにする。『種の起源』(1859)と『人種の起源』(1871)が発表された後、間もなくエジプトにも進化論が伝播されていった。だが、基本的には西洋事情の一片として、または、伝統と対立するといった宗教的課題として新聞紙面において記載された。アル・タビーブ(al-Tabib 1884)やアル・ディヤー(al-Diyya 1898)等が進化論を紹介する記事を載せていたが、エジプトを含むアラブ地域で初めて進化論が紹介されたのは、1876年に刊行された月刊ジャーナルアル・ムクタタ(al-Muqtataf)に記載された記事であると考えられている²⁷。

その記事において、レバノンの教育家であるR.ベルベル(Rizkullah Berber, 1836-1886)が「人間の起源」というタイトルで進化論を紹介している。ベルベルは、西洋の生物学者の見解を参考しつつ、進化論を用いて宇宙の創造に関し宗教的な説明をしている。そして、聖書における創造説とその信ぴょう性を図り、創造説を否定する物質主義者の理論を批判している。その中でも、イタリアの生物学者であるフランチェスコ・レディ(Francesco Redi, 1626-1697)の自然発生説の反駁とイギリスの生物学者であるトマス・ハクスリー(Thomas Huxley, 1825-1895)の極端な進化論、ジョン・ティンダル(John Tyndall, 1820-1893)の宗教の

弁証を批判している²⁸。またベルベルは、フランス人の生物学者であるシュヴァリエ・ド・ラマルク (Chevalier de Lamarck 1744-1829) の『動物哲学』における種の変化に関して解説している。ここでベルベルは、ラマルクはアッラーの存在を信じ、宇宙の全ての創造はアッラーに帰しているが、物の起源に限定した場合、その後の物の進化はアッラーに干渉されていないと解説している。また同氏は、生物の起源に関するジョン・ティンダル (John Tyndall 1820-1893) の解説について、魅力的に映るが、聖書の内容に対立する記述が多いので、この理論は否定するべきであると述べている。さらにベルベルは、この説は実際に実証することができず、またダーウィン自身も神の存在を否定していないにも関わらず、ティンダルの理論は結果的に神の存在を否定することになると強調している²⁹。

以降、アル・ムクタフ誌では次々に進化論に関する記事が掲載され、西洋における進化論の議論や展開がほぼリアルタイムに、かつ網羅的に伝えられた。1877年には「動物の性質の本」が、1878年には「人類」、1881年に「ヨーロッパの人種」など、進化論に関わる記事を次々に掲載していった。

2-2. 宗教との調和

進化論を肯定的に捉えるエジプト人の立場は様々であった。そのうち、進化論と宗教との過激な対立を防ぎ、調和的な立場を貫く一派の代表の一人がビシャーラ・ザルゼル (Bishara Zalzl) である。ビシャーラは、1879年にエジプトで『人間と動物生理学の啓蒙』を出版した³⁰。これは、高等学校の理科の教科書として使用された。同書では、イスラーム世界に進化論が伝播されて以来、激しく議論された問題や、解消されていない多くの課題について取り扱われている。例えば、創造性や、宇宙の起源、人種の起源と進化などに関する課題である。執筆の目的は、進化論に対し過剰に反応する多くの宗教家が抱える疑念や疑惑を解消するためであった。また、人間の精神的な面や魂といった抽象的概念を無視する物質主義者の誤解を解き、人間はサルが優位に変化した種類から進化した生き物であるというダーウィンの進化論の支持者の誤りを正すことも同書執筆の目的としている³¹。ビシャーラの理論をまとめると、科学と調和・連携できない宗教は、社会の改革

と道徳の改善と美德の恩恵において実用的な宗教ではないが、アッラーから下された宗教は決してそうではないと主張している。彼は、自由と科学が人々を無神論と妄想へ導くと認識する人達は、宗教と科学の本質を理解していないと指摘している。

その後、1880年代にかけては進化論に対する弁護的意見が台頭した。こうした肯定的立場を表明したエジプト人は、欧米諸国での進化論の支持者、特にキリスト教の牧師や思想家などの見解を抜粋し、ダーウィンの進化論が宗教と対立する思想ではないという姿勢を示した。例えば、欧米での議論を利用し、進化論と宗教との対立を否定し、調和的な対応を追求した。1882年には『アル・ムクタタ』などの月刊誌において進化論についての記事が断続的に発表されるようになる。これらの記事の執筆者はほとんどが無名であった。彼らは、エジプトの知識人はダーウィンの進化論の価値を見直し、ダーウィンの努力を再検討すべきであると考えた。そこで彼らは、上述のように、欧米諸国で進化論を信じる牧師と思想家の見解を示し、進化論は宗教と対立する思想ではないと解説した。例えば、ウェストミンスター寺院の説教者バリー牧師の、「自然淘汰はキリスト教に反する考えではなく、信仰においては奇妙なことではない」という見解を用いている。また、アメリカの福音的なカルヴァン神学を代表するチャールズ・ホッジ (Charles Hodge 1797-1878) と、宗教学者および哲学者でもあるジェームズ・マコッシュ (James McCosh 1811-1894) の論争を紹介しつつ、進化論の正当性を示している。例を挙げると、同誌では、『What is Darwinism』(1874)においてホッジがダーウィニズムが無神論であると主張するのに対し、進化論に肯定的な立場であるマコッシュの反論を次のように引用している。

科学と宗教の間に衝突或いは葛藤があると考えより、和解を求めるべきである。そして、実際には宗教における生物の創造と進化は、ダーウィンの進化論と矛盾していない。従って、ダーウィニズムが無神論的考えでもなく、聖書に対する妥協のつかない敵意もない³²。

このように、欧米での進化論に対する論争が、リアルタイムでエジプトの新聞紙面上において報道されていたことから、進化論

と宗教との関連性は、エジプト人にとっても関心の中心であったことが明白である。

2-3. 進化論の肯定派

進化論を肯定的に受容し、エジプトに積極的に紹介した知識人の代表者はシブリー・シーメール (Shibly Shemail 1856-1917)とサラマ・ムーサ(Salama Moussa 1887-1956)である。

シブリーはアラブのダーウィンと言われ、生理学的唯物論の著書『力と質量』(Kraft und Stoff) を著したビューヒナー(Friedrich Ludwig Büchner, 1824-1899)の影響を強く受けた。シブリーの代表的な著作は、Falsafit Al-Nushu' wa Al-Irtika'(進化論の哲学)である。彼の見解は、進化論自体がイスラーム思想の一部であり、アラブ人は中世・近世時代以前から生物の進化について解説してきたというものである。彼の思想を次の点にまとめる。

シブリーは、心や精神、意志や靈魂など形而上学的な概念を拒絶している。一方、適者生存や競争淘汰という考えは否定しつつ、相互依存の法則を採用している。進化論に関するシブリーの解釈は次のとおりである。物質は不滅であり、つまり永遠に変容しているが永遠に残存する。物質は継続的に変容していく中、古い形を昇華しつつ新たな形に変わり、従って新たな特性および性質があらわれ、複雑な形になっていく。こうした変容を起こす力は外面的のみならず、その物質自体の中にもある。物質が分裂せず無限に変容することは、植物や動物、人間、金属など全ての物に当てはまる。こうした進化は社会にも当てはまるが、「自然淘汰」「適者生存」という考えは誤りである。物の変容は循環し、生物と物質の存在と生存は、競争と適切性という原則より、相互存在の法則に依存する。また、自然と社会も同様であるので、文明と社会は競争というより相互依存の法則によって変容している。また、アラブ社会は西洋に劣っているが滅亡はしない。アラブ人が西洋人に劣っているのは人種優越のみならず、思考法の問題である。アラブ人は、生活をはじめ、社会や政治、経済などを宗教に帰しているが、宗教は迷信であり、真実を知る唯一の方法は自然原則と科学のみであると論じている³³。

サラマは、進化論における競争淘汰は真実であり、適者生存という考えを肯定した。彼は適者生存が生物のみならず、様々な分

野において当てはまると述べている。エジプトのみならずイスラーム世界で大きな騒動を起こした彼の理論の一つは、言葉の進化である。彼は、アラビア語は近代文明に適切ではなく、英語と比べアラビア語は淘汰されると考えた。また、アラビア語を分類し、標準アラビア語よりエジプト方言の方が適した存在であり、教育と学問はフスハー(標準アラビア語)より口語の方が適切であると考えた。社会と文明の進化においては、西洋社会の方が強者・適者であるので生存する。そのため、エジプトは中東との縁を切り、急ぎ西洋に完全に帰属すべきと強くすすめた。また、人種改良論を解説しつつ、西洋人とエジプト人の格差は科学のみならず、人間の知力・体力も含まれるので、エジプト人を西洋人と結婚させ、知力・体力の優れた子孫を作るべきと説いた。また、大きな議論を起こした彼の考えには、黒人の滅亡は不可避であること、世界から宗教思想と道徳が淘汰されるというものがある³⁴。

2-4. 進化論の反対者

進化論を完全、又は部分的に否定したのは宗教家であった。彼らは、西洋文明の物質的な優越性を認めているが、倫理が優れているイスラーム教の方が最終的には優位であると考えている。その思想の代表的な人物はジャマルッディーン・アフガーニー(Jamāl al-Dīn al-Afghānī 1838–1897)である。彼は、進化論を否定する内容の著書1881–2年にAl-Radd 'ala al-Dahriyyi(物質主義者への反駁)を執筆した。そして、彼の弟子であるムハンマド・アブドゥ(Muhammad Abduh 1849-1905)が、師匠の著書をアラビア語に訳し、エジプト及びアラブ地域への普及につとめた³⁵。生存競争に関するアフガーニーの見解では、人間同士が取り分を求めるため、競い合って殺し合う。それにより、強者は弱者の取り分を奪い、その後その弱者が力を持てばまた強者に反逆する。その結果、人類が地上から絶滅すると思った³⁶。しかし、アフガーニーは完全に進化論を否定しているわけではなく、宗教の進化に関して部分的に利用している。彼は、自然崇拜や仏教等の多神教は進化せず文明の進歩を阻害する一方、一神教は人間の理性と感情の上昇によって進化すると述べている³⁷。

アブドゥの見解を見ると、ほぼ師匠であるアフガーニーと同様である。アブドゥは進化を認めているが、ダーウィンが主張する

ような進化論ではない。彼は、「進化論は西洋の発明ではなく、古代からアラブの学者は生物の進化を論じている」と言い、「進化は神の法則である。神の法則ではあらゆる物は小さく生まれ、成長して徐々により良い形態となる。...全ての生物と物質は変容し進化していったことは明確であり、研究でも証明されている」ものの、「動植物の創造と起源に関する進化論的な解釈は誤りである。例えば、人類が猿から進化したことは空論」であり、「進化論者が主張する法則、所謂「競争淘汰」は、宗教の法則に反している」と述べている³⁸。換言すれば、アブドゥは進化論という概念を認めているが、西洋人が論ずる進化論の「生物の進化」と「競争淘汰」という考えはイスラーム法に反するとして、認めていないと言えよう。また彼は、宗教の進化にに関して次のように述べている。

宗教は人知と情感が発達することで進化する。.....アッラーは時代毎に人間の知力と情感の発達に適する宗教を下している。.....古来から人間の理性と情感が進化する度に、適切な宗教が下され流布されてきた。大昔、人類文明がまだ初期であったとき、人間の知力は発達しておらず、感情的であったため、アッラーから命令と抑止力を中心とする宗教を下された。それはユダヤ教である。...時代の変化により、人間の情感が進化したことに伴って欲望が拡大した。そこで、欲を抑圧し、感情と慈悲に訴え、魂の平安を得るような宗教が下された。それはキリスト教である。...そして時間の経過を通じて、人間の理性と情感が最も上位に達したことによって、理性と感情に訴え、現世と来世の幸福へ導くような宗教が下された。それはイスラームである。³⁹

アブドゥは宗教の進化について、進化論を部分的に用いつつ、時代と人間の情感と知性の進化に伴って、一神教は適切に進化してきたと論じている。

以上で触れたように、エジプトを含むイスラーム世界において、進化論の否定派は殆どが宗教学者であった。彼らは、イスラームに反する進化論を糾弾する一方で、イスラームの実証に役立つ箇所は利用していたのである。

結論

上記のことから、日本とエジプトにおいて、進化論の導入は、比較的西洋諸国との時間差がほとんど無かったことは類似している点である。しかしその一方、両国における進化論に対する態度、そして関心はかなり異なっている。エジプトでは進化論と宗教との間に緊張があった。宗教家は進化論に対して否定的な態度を貫き、ダーウィンの理論が虚妄であると実証しようと務めた。一方、日本では、こうした緊張感がなく、一神教のような制約もなかったため、進化論はかなり積極的に、しかも新知識を求める好奇心の高い日本人が赴くままに歓迎された⁴⁰。

また、進化論に対する両国民の関心は異なっていた。日本では、ダーウィンの進化論より社会進化論のほうが魅力的であった。それと共に、白人の優越主義に関する人種主義についての議論が盛んであった。例えば、内地雑居という問題に関わる白人の優越の知力・体力や資本力、そして近代化の進化に関する議論である。一方、エジプトにおける導入の特徴は進化論への関心というよりその正当性と実証性への関心であった。また、エジプト人は社会進化論よりダーウィンの進化論の方に大きな関心を示していた。とりわけ、人種を含む生物の進化論がエジプト人の関心の中心だった。

両国における進化論の受容の最たる相違点は進化論を考える基準である。日本では進化論自体が基準であった。つまり、日本において、進化論自体は問われる理論ではなく、実証性の基準、判断材料として用いられた。論争において、それが進化論の理論に沿った見解であるかどうかの正当性を図る基準となったのである。進化論という理論は証明ずみの真理として一段上にあって、論争者たちは自分の言いたいことがどれだけ進化論に合致しているかを競っていた⁴¹。これに対して、エジプトではイスラームが思考法の基準であり、人間を含む宇宙全体はアッラーの意志に沿って創造されたものであると認識されている。進化論が紹介された際は、大抵が批判を受け、少なくとも実証なされるべきものと見做されていた。両国におけるその相違のキーワードは宗教、とりわけ一神教である。日本はエジプトと異なり、一神教国でなく、進化論に抵抗する思想がないことが相違の原因であろう。

注

1. ハサン・カマル・ハルブ、『福沢諭吉とムハンマド・アブドゥの近代科学知識の啓蒙:『訓蒙窮理図解』と『コーラン注釈』を中心に』、大阪大学 2010年
2. 鶴浦裕、「社会ダーウィニズムの受容と展開:国際比較のための一枠組み」『現代英米文化』18(pp.107-114)、1988年、pp.107-8
3. 長尾史郎、「日本の進化論受容史と天皇制度」『人文科学論集』58(pp.1-23)、2012年、p.9
4. 廣井敏男他、「日本における進化論の受容と展開一丘浅次郎の場合一」『東京経済大学人文自然科学論集』129 (pp.173-195)、2010年、p.173
5. 「日本の進化論受容史と天皇制度」、p.11
6. 上掲書、p.10
7. 上掲書、p.11
8. 上掲書、p.12
9. 小泉仰、「『原法提綱』における西周の権利思想— 福沢諭吉の天賦人権思想と比較して —」『北東アジア研究』14・15(pp.87-102)、2008年、pp.88-99
10. 福澤諭吉、『福澤諭吉著作集 第3巻 学問のすゝめ』、慶應義塾大学出版、2002年、p.6
11. 加藤弘之、『人権新論』、谷山楼 明15(国立国会図書館オンラインへのリンク
[https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/798590\(2021.08.12\)](https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/798590(2021.08.12)))
12. 永井道雄、『近代化と教育』、東京大学出版、1969年、p.167
13. 鶴浦裕、「近代日本における進化論の受容と井上円了」『井上円了センター年報』2 (pp.25-48)、1993年、p.33
14. 小林瑞乃、『中江兆民の国家構造』、明石書店、2008年、p.101

15. 上掲書、 p.102
16. 上掲書、 p.107
17. 上掲書、 p.103
18. 許時嘉、『明治日本の文明言説とその変容』日本経済評論社、2014年、p.77
19. 上掲書、 p.78
20. 上掲書、 pp.78-9
21. 上掲書、 p.79
22. 沖田行司、『日本近代教育の思想史研究—国際化の思想系譜—』日本図書館センター、1995年、p.221
23. 上掲書、 p.222
24. 「近代日本における進化論の受容と井上円了」、 p.35
25. 『中江兆民の国家構造』、 p.110
26. 「近代日本における進化論の受容と井上円了」、 p.39
27. al-Muqtataf, Vol.1 (Part11), 1877.4
28. Ibid, pp. 242-3
29. Ibid, pp.243-79
30. Bishara Zalzl(1879). Tanwir Al Adhhan fi Eilm Hayat Al Hayawan al wa Al Insan wa Tafawut Al'umam fi Almadaniat wa Leumran, Alexandria
31. Ibid Moqaddimah
32. al-Muqtataf, Vol.1 (Part11), 1882.7, p.6
33. 本節で参考にした資料: Shibly Shemail, *falsafit al-Nushu' wa al-Irtika*(1910)、Marwa Elshakry, *Early Arabic Views on Darwin*, Georgetown University Press(2012).
34. 本稿で参考にした資料 : Salama Mousa, *Divine Thoughts*(1912), *Descent and Development of Mankind*(1928), *Eloquence and the Arabic Language*(1945).

35.本節で参考にした資料：平野淳一「アフガーニー思想におけるイスラームと西洋の布置図— ジャマールッ ディーン・アフガーニー『物質主義者への反駁』—」、『イスラーム世界研究』第1巻 (1)、2007 年(『物質主義者への反駁』と称する) , Emara,Muhammad.ed.*Al-'AmalAl-KamilahLil-ImamMuhammad Abduh*, Cairo Dar Al-Shouruq, 1993, Vol.3(*Al-'AmalAl-Kamilah*と称する)を使用する。

36. 『物質主義者への反駁』、pp. 394-402

37. ハサン・カマル・ハルブ、「井上円了とムハンマド・アブドウにおける進化論— 宗教を中心に—」、『国際井上円了研究』8 (pp.136–149)、2020年、pp.139-43

38. 上掲書、p.141

39. 上掲書、p.144

40. 「近代日本における進化論の受容と井上円了」、p.29

41. 上掲書、p.33

日本語の参考文献

藤井聡、『公衆免疫強靱化論』、啓文社書房 2020年

今西錦司、『今西錦司全集 (第12巻) ダーウィン論・主体性の進化論』、講談社 1993年

片山杜秀、『皇国史観』、文藝春秋 2020年

嘉戸一将、『再発見 日本の哲学:北一輝—国家と進化』講談社 2017年

菊地明、『坂本龍馬進化論』、新人物往来社 2002年

眞嶋亜有、『「肌色」の憂鬱 - 近代日本の人種体験』中央公論新社 2014年

右田裕規、『天皇制と進化論』青弓社 2009年

桃崎有一郎、『武士の起源を解きあかす—混血する古代、創発される中世』筑摩書房2018年

中村敏子、『女性差別はどう作られてきたか』、集英社2021年

梅棹忠夫、『文明の生態史観はいま』、中央公論新社 2001年

田中友香理、『優勝劣敗と明治国家:加藤弘之の社会進化論』、ペリかん社 2019年

横山利明、『日本進化思想史〈1〉明治時代の進化思想』、新水社 2005年

英語の参考文献

Charles Darwin, *On the Origin of Species*, Arcturus 2021.

Clifford R. Adams, *The Mission of Japan and the Russo-Japanese War*, Forgotten Books 2012.

Ernest Satow, *A Diplomat in Japan*, Cambridge University Press 2015.

KAWABATA Hiroto, *Lost in Evolution: Exploring Humanity's Path in Asia*, 出版文化産業振興財団 2020.

Kazuko Tsurumi, *Social Change and the Individual*, Princeton University Press 2015.

Kiyoshi Karl Kawakami, *Japan and the Japanese as seen by foreigners prior to the beginning of the Russo-Japanese war*, Ulan Press 2012.

Shafik Jeha, *Medical Department: And the First Student Protest in the Arab World in the Syrian Protestant College*, Syracuse University Press 2005.